

## 留学生に対する教養教育指導の試み

An attempt at teaching liberal arts to foreign students

湯 麗敏

Tanglimin

### 一、はじめに

本学は毎年多くの留学生を迎えており、その数は今後も増加傾向にある。国際情勢の変化に伴い、必要に応じることにより、日本政府も留学生の積極的な受け入れ政策を打ち出している。

異なる国から来日した留学生を日本の大学生活に適応させ、スムーズに専門課程に編入し、学業を全うし、有意義な留学生活を送ってもらうためには、特に入学した直後の教養教育の実施が鍵となることを、今まで留学生の教養教育に携わってきた私は痛感している。

今までの仕事の反省と総括を踏まえ、留学生に対するより良い教養教育を行うために、その教育のあり方と効果的な指導方法を探ってみたい。

小論は、以下の四つの部分から上記のテーマをめぐって探っていきたいと思う。

- ・ 中国人留学生の数と現状、日本に留学の動機
- ・ 中国人留学生が抱えている問題
- ・ 留学生に対して、どんな教養教育を行うべきか
- ・ 効果と今後の課題

### 二、留学生の数と現状、日本に留学の動機

日本にいる中国人留学生の人数については数々に統計があるが、日本学生支援機構の最新調査では目下、在日中国人留学生数は、すでに9万人以上に達している。

留学生たちは、日本に来て、主に大学、短大、高等専門学校で勉学に取り組んでいる。さらに、修士課程、博士課程に進学し、専門分野の研究をし続ける留学生も多く見られている。

本学に入学された留学生の状況を見ると、二通りに大別されることが分かる。半年あるいは一年間の交換留学生として来る人がいるほか、四年間学部生として在学し続ける留学生も最近はどんどん増えている。ほとんどが本学と協定を結んだ中国の天津社会科学院と大連半島外国語学校から本学に入学した中国人留学生であった。

## 天津社会科学院からの留学生数

入学年度	平成	入学者数	男	女
2001	13	5	1	4
2002	14	10	6	4
2003	15	10	7	3
2004	16	10	6	4
2005	17	13	7	6
2006	18	11	8	3
2007	19	8	4	4
2008	20	14	7	7
2009	21	13	12	1
合計		94	58	36

## 大連半島外国語学校からの留学生数

2008	20	2	0	2
2009	21	7	1	6
合計		9	1	8

以上の表から分るとおり、本学に入学した留学生数は着実に増えており、これからもまた、引き続き増加傾向にあると予想される。

昨今の留学生とかつての留学生を比較した場合、先ず大きな異なるところは、留学に来たときの年齢である。一昔前は、殆ど二十歳過ぎた成人或いは社会経験がある世帯持ちの人が多かったが、今は十八歳、十九歳という未成年者が多い。留学生の増加傾向そして低年齢化という現象は注目に値する。

中国の教育部の調査統計によると、2007年度出国の留学生総数は14.4万人、内私費留学生数が12.9万人であるのに対し、2008年度出国の留学生総数は17.98万人で、内私費留学生数が16.16万人に達した。たった二年間で出国留学生の数が3.52万人増加し、そして私費留学生の比率が半分以上の絶対的な多数を占めるようになっている。当然、本学に来ている中国人留学生も全員私費留学生であった。

昔、中国では、留学に行ける人は、金持ちかエリートか極少数の特権階層に限られると思われていたが、今や留学ということはもう日常茶飯事であり、平民化が進んでいる。原因として考えられるのは現在中国国内で実施している大学の入試制度がとても厳しい淘汰制度であり、受験生たちが大変なプレッシャーを感じていることから、数多くの受験生が厳しい競争と耐え難い圧力から逃げ出そうとして留学の道を選んでいるということである。その上に、今外国の大学では、特に日本の場合、少子高齢化が深刻化し、大学が「全入」時代に突入する中、多くの大学で留学生の受け入れに対する姿勢が昔と違って、ずいぶん緩和されたこと、また留学生の入国に必要な書類や審査も昔ほど煩雑ではなくなった一因もあった。もう一つ考えられる原因は、中国の改革開放の政策により、国全体或いは庶民の経済力が全体的に上がってきているということである。お金持ちの家庭は子供を外国に留学させるということは昔からあった考え方とも言えるが、そのような風潮の中で、「留学」ということも「平民化」の方向に変わりつつある。

さて、本学に入学した中国人留学生の来日動機、目的について、分析すると、以下の7点があげられると

思う。

① 日本語を学ぶため。

しっかりと生きた日本語を習得するため。昨今営利主義が強い中国国内の日本語学校に高い学費を払うよりも留学するほうが効果的と考えられている。

② 中国の大学の厳しい教育、激しい競争からの逃走。

比較的のんびりできる日本の大学に入ったほうが楽で、しかも同じく専門知識を身に付けられ、同等の価値の卒業証書がもらえると認識されている。

③ 日本という国を知るため。

中国にいながらでも日本について勉強することはできるが、本やテレビ、新聞からと、間接的な習得方法しかとれない。一衣帯水の隣国であるとはいえ、世界第二の経済大国でもある日本に対する好奇心は、直接見聞なし、触れ合わなければ、その本当の姿、真相がやはり分かりにくいと考える、「百聞一見しかず」という発想法が機能しているだろう。

④ 本人の願望ではなく、両親、家族からの薦めによる留学。

この場合、留学の目的動機が根本的に不明瞭であり、一種の盲目的な行動だと言える。ほかでもなく親の面子、虚栄心を満たすためである場合が多い。

⑤ 親元から離れたいと自立心からの留学。

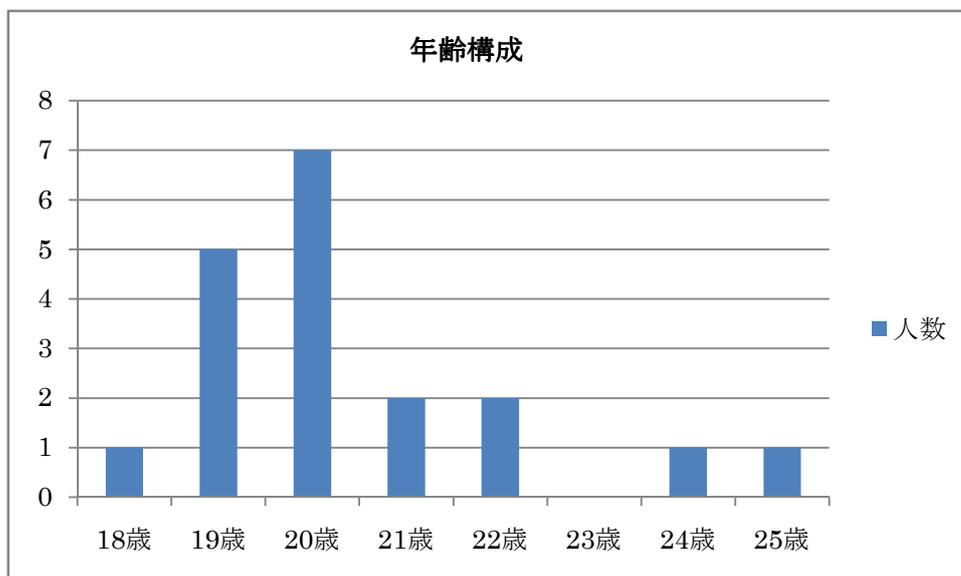
友達が日本に留学しているから、私も留学したい、私も一人でやって行けるという自立心から起こした行動。

⑥ 本国の大学受験に失敗して、日本で進路を探すため。

⑦ 日本での就職、あるいは将来の企業に備えた留学。

とにかく、人によって、留学に来る動機と目的がさまざまなので、それぞれ違っている。

では、アンケートによる作られたグラフで本学に在学している一年の留学生に関する事情を見てみよう。

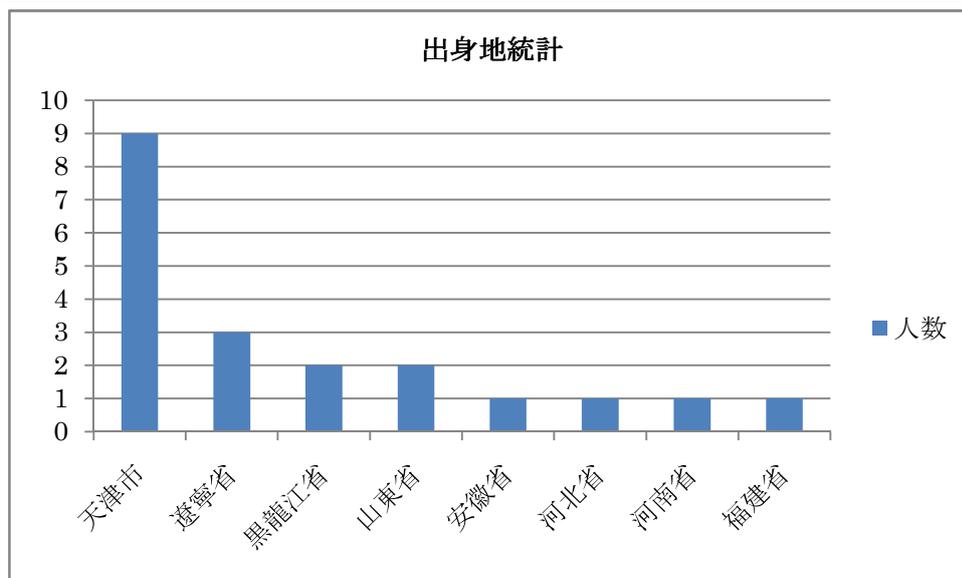


年齢構成

年齢	18 歳	19 歳	20 歳	21 歳	22 歳	23 歳	24 歳	25 歳
人数	1	5	7	2	2	0	1	1

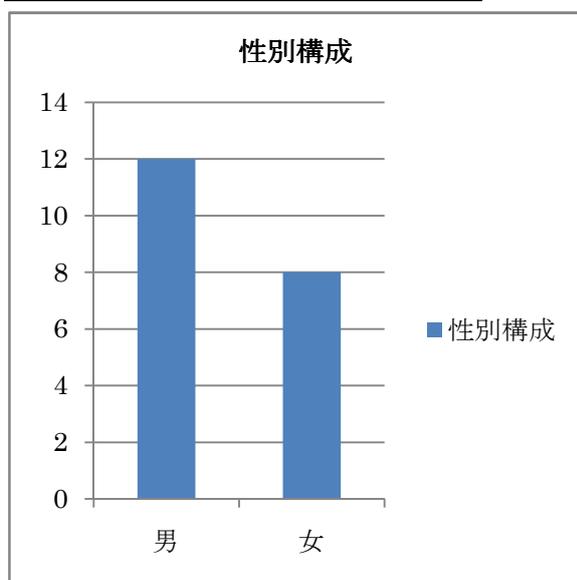
出身地統計

出身地	天津市	遼寧省	黒龍江省	山東省	安徽省	河北省	河南省	福建省
人数	9	3	2	2	1	1	1	1



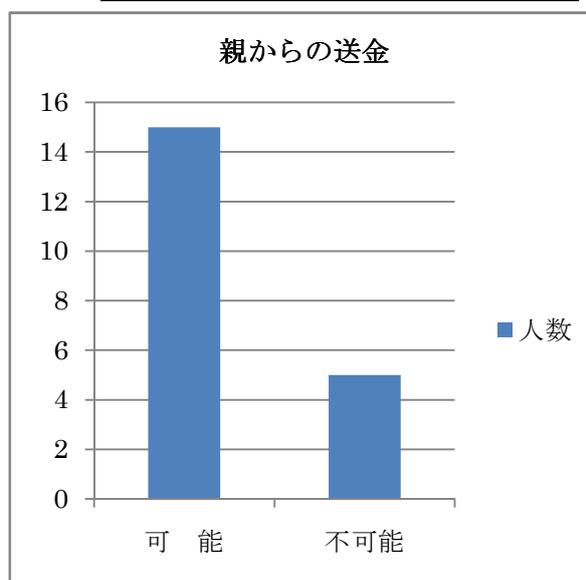
性別構成

男	12
女	8



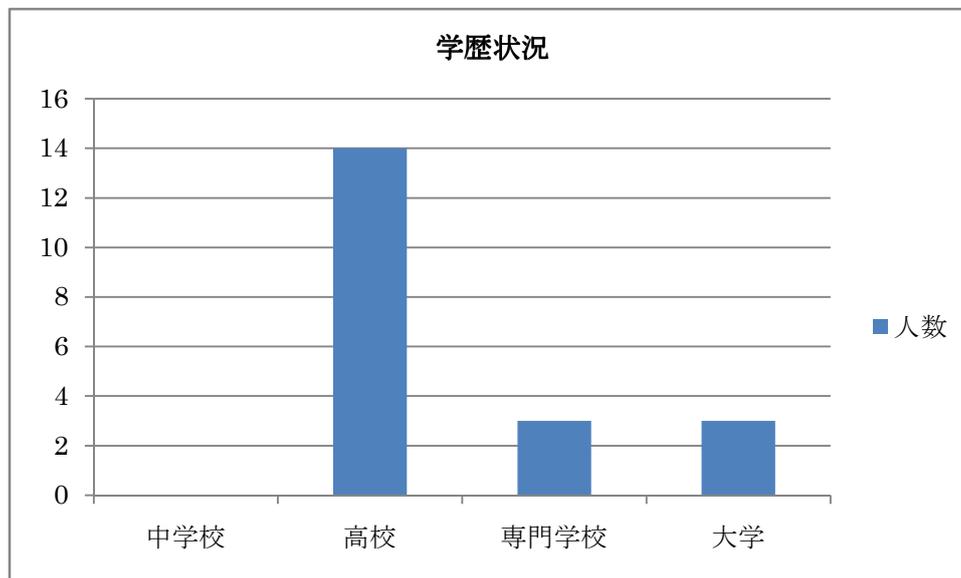
親からの送金

可能	15
不可能	5



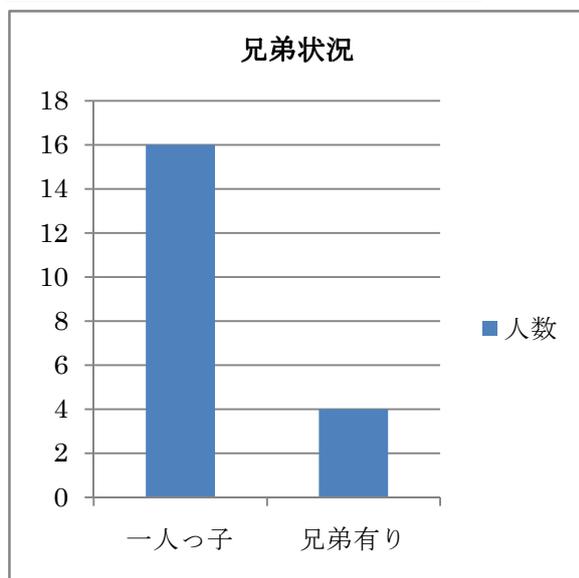
学歴状況

学歴	中学校	高校	専門学校	大学
人数		14	3	3



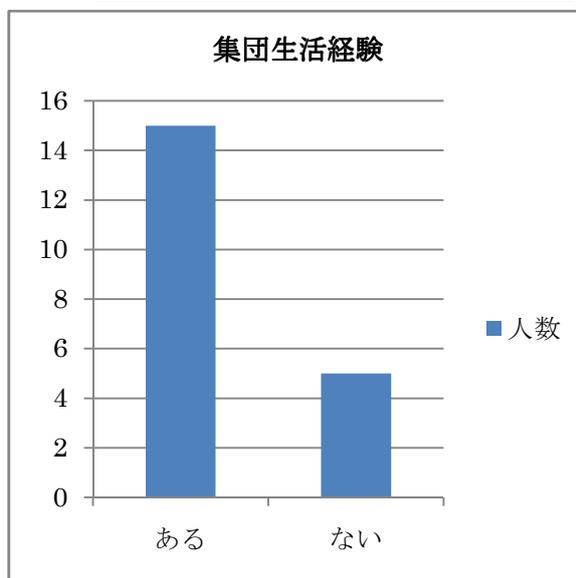
兄弟状況

一人っ子	16
兄弟有り	4



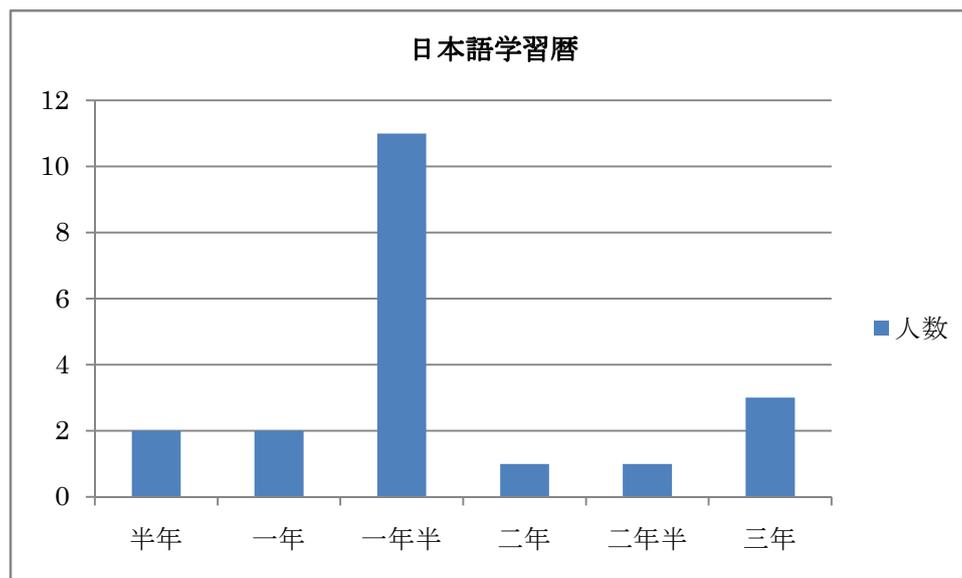
集団生活経験

ある	15
ない	5



日本語学習暦

半年	一年	一年半	二年	二年半	三年
2	2	11	1	1	3



### 三、来日後の留学生在が抱えている問題

留学生たちは、普遍的に以下のような問題を抱えている。

- ・ 文化背景の違いによって生じる日本の同年代の人たちとの思想や考え方の違いやそこから生まれた違和感。
- ・ 言葉の障害と教育方法の違いによる学業面でのストレス。
- ・ 生れ育った生活環境、習慣の違いによって生じる誤解や摩擦。
- ・ 学費と生活費の捻出のために、アルバイトと勉学の両立が旨くできない。
- ・ 母国から離れて、親元の過保護から離れて、孤独感によるストレス。
- ・ 掃除、洗濯、炊事、身の回りのことをなかなかこなせられない。
- ・ 一人っ子として育てられたため、わがまま、協調性が足りなくて、友人作りができない。

とにかく、異国にいるストレスにより不健康な心理状態におかれている留学生在が数多く見られる。これまで、中国人にとっては、西洋へ行くより、東洋の日本に行くほうが暮らしやすいという安易な考えを持つ人が多かった。と言うのも、日本は中国と同じくアジアに属し、同じ黄色人種であり、同じような漢字を使っているからである。しかし、一見違いの少ない両国ではあれ、日本に来てみて初めてこの国の歴史、文化、言葉、国民性、環境、風俗習慣など、中国とだいぶ違っていったことに気がつくのである。価値観、発想法、考え方の違いにより、留學生たちはいろいろな面で大きなショックを受けており、いわゆるカルチャーショックの問題が顕著に現れる。

一方、中国の現行の教育制度と先進国の教育制度では、大きな違いがあることを認めざるを得ない。今まで中国の学校教育は、殆ど教師と教科書を中心に行われている状態であり、日本を含め先進国での教育は、学生の自主性を重視し、教師が導く役割を果たす。常に受動的な立場に慣れてきた中国人留學生はいったん日本の大学に入ったら、右往左往して、いったいどのように勉強を取り

組めばよいのか戸惑ってしまう傾向が強い。そして、高校にあるような担任制度がない大学では、授業に出なくても、強制的に出させられることもなく、だんだん授業をサボるようになり、テストの結果が出て初めて自分の力不足を実感する。成績が悪ければ、挫折感も同様に大きくなる。

もう一つ現象として、日本語の能力が低い学生が、他人と交流するときに満足に意思疎通ができなくて、なんとなく卑屈と差別を受けたような感じをしている。結局、人との付き合いをだんだん恐れるようになり、回避するような選択をする傾向もある。また、中国ではある程度の学歴、職歴を持っていた裕福な家庭から来た留学生の場合、日本語能力が低いことだけで自分の思うままに行動ができなくなることに對し、母国で培った優越感からいきなり卑屈になると言う心理的な落差も大きい。自尊心を傷付けられたと思いつつ、ついに正常の勉学に取り組む自信がだんだん失っていくことによって、自閉傾向が強まりストレスも強く感じるようになる。

本学にきている中国人留学生は、全員私費留学生なので、学費が何割か免除されるとはいうものの、残りの学費と日本の高い生活費が彼らにとって大きな負担となっていることに変わりはない。勉学の隙間を利用して、アルバイトでお金を工面せざるを得ない状況が多い。さらに、百年に一度といわれる金融経済危機に遭遇し、失業者がどんどん増えている今日の日本では、留学生たちがアルバイトができる職場もなかなか見つからなくなっており、あっても、労働条件が悪く、日本人がしたがる仕事、あるいは深夜の仕事ぐらいであった。お金を稼ぐためにはそれでも受けるしかないが、その結果、体力的に限界を迎え、授業を休んだり、集中力が欠如するような留学生がよく現われている。勉学とアルバイトをいかに両立して乗り越えるかは大変深刻な問題である。

留学生にとっては周囲の日本人とうまくコミュニケーションを取れないことも深刻な問題のひとつである。日本に留学にきて日本人と友達になりたいという気持ちは恐らく誰もが持っていると思うが、しかしどうやって付き合えばよいのかに戸惑い、結局日本人の友達が一人もできなかったまま留学を終え、寂しい思いを抱えたまま帰国してしまった人も少なくない。

兄弟がいない「一人っ子」として生まれ育った今の留学生は、競争意識が強く、率直で誠実である反面、感謝と思いやりの気持ちに欠け、責任感が薄く、忍耐力が欠ける、協調性にも欠けるいわゆる自己中心的なタイプが多く、それが数々の問題を引き起こしている。ではこのような学生にどのような教育、アプローチをするべきか、以下の章で私見を述べたい。

#### 四、留学生に対してどんな教養教育を行うべきか

大学在学の四年間は、人生の大きな転換期である。専門科目の勉強に入る前までに、大事なものは、教養教育である。我がまま、自己中心的で自己主張が強い「一人っ子」の留学生を品格のある人間、国際社会の中で重荷を背負える、社会に役に立つ人間に育て上げることが、この教養教育の一番重要な目的である。

専門知識、科学技術、思考能力などが大事なものと同等に、品格と教養を備えることが人間としては大事であり、社会に立派な人材を送るために、何よりもまずそこに力を入れなければならないと考

える。そして、品格ある人間を育てるために教養教育を施すためには、先ずいまの留学生をよく知ること、彼らの要求と希望をしっかりと知った上で、彼らに関心を寄せ配慮し、彼らを温かく見守ることが大事である。それによって、留学生たちが生まれ育った環境と違った異文化の環境の中で、暮らし、勉学をするという環境が整う。彼らの未来への希望と積極性、意欲を引き出すことが大事なのである。彼らに何が好きで、将来何をやりたいのか、今の留学目的、目指す目標、いかに真面目に生活していくかについて真剣に考えてもらいながら彼らに向き合い、教養教育をおこなわなければならないと私は痛感している。

さて、留学生の現状と抱えている問題に合わせて、昨年一年間の教養教育の内容とやり方を振りかえてみてみようと思う。

### ・勉学

日本の大学と中国の大学や高校との違いについては留学生たちが殆ど知らない。高校生を生徒と言い、大学生になって始めて学生と呼ばれることにビックリしたという留学生もいた。高校では、いつも自分のクラスの教室で授業を受けているのに大学では、学生のほうが授業ごとに違う教室に移動する、自分の時間割が決まったらそれぞれの教室で授業を受けるようなことは大学に入ってから初めての経験だ。

留学生たちが一番不慣れで戸惑いが強かったのは、1コマの授業時間は90分間であること。もともと言葉の壁がある中で、90分間は非常に長く感じられて、なかなか最後まで集中ができなくて、私語や居眠りをしてしまう留学生が多く見られている。

そこで教養演習の時間で、日本の大学、大学の生活、講義の受け方、ノートの取りかた、レポートの書き方、学び活用力を高めるというような基本的なことから留学生たちによく時間をかけて、説明と指導を行ってきた。入学当初は皆に自分の勉強計画、一か月の努力目標、半年乃至一年の努力目標を作ってもらって、そして教養演習の時間で、お互いに発表してもらい、実行するよう指導した。また、ゼミ生の一人ひとりに履修指導を行い、さまざまな悩みと相談を毎日日夜間わず行ってきた。

留学生にとって、真の魅力ある開かれた教育を受けることができるかどうか、安定した生活の中で、勉学などに励むことができる環境があるかどうか、と言うようなことは、確かに大変重要なことだと思う。

### ・生活

元気さ、明るさが保たれて初めて、勉強にも力が入ると考え、留学生が抱える生活上のさまざまな悩み、問題などに対する生活指導を重点的に行い、円滑な留学生活が送れるよう支援をしている。今まで一人暮らしの経験がなかった留学生が全体の70%を占めている。来日までに、ある程度の寮生活をしてきた学生もいたが、自立した生活ができない子が多いことが事実であった。親元から離れて、初めての一人暮らしを異国で経験し、洗濯、掃除、炊事、買い物などが、いかに困るかは明白である。それに対応して、教養演習では、留学生たちに郷に入って郷に従うと言う意識を持ってもらうように教育を実施してきた。日本での暮らしが始まった以上には、中国にいたころの生活習慣とやり方はもはや通用せず、日本人の生活、日本

での衣食住に関すること、日本での生活に守らなければならない規則、マナーなどを知ってもらい、従順しなければならないことを常に意図的にきめ細かく指導をしている。

例えば、今まで留学生たちは、全員と言えるほど、皆ベッドとテーブル、椅子の生活を二十年間近くしてきたことに対して、今は、畳の部屋での生活に変わった。生活スタイルの変化になるべく早く慣れてもらうために、部屋の掃除、共用場所の掃除、ゴミの出し方、アパート周囲の草むしりなどのことまで、日常的に指導し、ルームメートの間では、お互いに助け合い、関心をし合い、優しい思いやりを持つように、情操教育を教養演習のひとつの支柱とした。

### 文化・規則・マナー

一年生の留学生たちは殆ど自転車で通学しており、危険な運転をしている場合も多い。毎年のように交通事故で怪我をする留学生がいるので、よりよい安全な留学生活を送れるために、交通安全教育を日常的に行っている。中国が右側通行であるのに対し日本では左側通行になっていることもあり、中国での感覚のままですと、交通事故に遭遇し、また事故を起こしやすいので、事故を未然に防ぐために、関係者には日本の交通規則や守らなければならないマナーを指導してもらった。

勉学には支障を来さないことを前提に、社会勉強として、また生活費の足しにと、殆どの留学生がアルバイトをしている。しかし最初のころはアルバイト募集先の面接に行っても断られることが多く、いらいらが募る学生が増える。そこで、大人としての礼儀、作法、マナー、面接に注意すべき事項などを留学生に対して、適切に指導とアドバイスを行うことが必要であると痛感している。

日本に留学に来て、日頃の勉学以外にも日本の文化、日本人の心と生活を知ることにもいかに重要かということを教養教育を通して、留学生たちの心にしっかりと植え付けられるように心がけている。今年入学された 20 名の中国人留学生を対象に異文化体験、社会勉強と称して桜のお花見、五箇山の合掌造り、立山、呉羽山の民俗民芸村、長慶寺での座禅、華道、茶道などの実地体験と見学を実施した。

毎日勉強とアルバイトに追われている留学生にとっては、なかなかゆっくり新聞やテレビニュースを見る余裕がなかったが、たとえ読んでも、聞いても百パーセントまで理解ができることがまだできていないため、教養演習の時間では、時事教育、天気予報、トップニュースの読解などを取り入れた。

親元から離れている留学生たちは、普遍的に自分の健康管理を如何にするかを知らないため、最近では今流行っている新型インフルエンザについての知識、予防方法、対策なども教養演習の内容として加わった。

国際大学に中国語を学びに来ている市民聴講生や中国に対して興味がある日本人の大学生たちとの異文化交流サロンが(水曜日午後食堂で)できたお陰で、お互いに素顔のままの交流を通じて、理解と認識を促進し、友人を見つけ、友情を深めるきっかけとなっている。それこそ草の根の国際交流にもつながっていたのではないだろうか。

## 五、効果と今後の課題

メンバーが全員留学生だけで構成された初年次の教養演習のゼミがあるからこそ、いろいろ取り入れられる可能性もあるというふうに見える。教育、管理の立場から見れば、このような形で割合やりやすいと思うが、留学生たちにとっても、週一回の教養演習のゼミにより、緊張感をほぐし、情報交換ができ、勉学と生活にある悩みとストレスが解消できる場と見られていた。

さらに、普通のゼミと違って、初年次の留学生教養演習を通して、異文化体験をされることによって、できるだけ早く日本を知り、日本人を知り、自分が生活しているまわりを知ってもらうことができた。このことが早く日本での留学生活に慣れる要因ともなっている。

日本人の礼儀、作法、マナー、習慣への理解が、日本人と付き合う時にある程度の自信を持たせている。一年生の留学生たちは、周りの住民に丁寧にあいさつをしたり、同級生の日本人と普通に声をかけたり、喋ったりすることができ、また地域の国際交流フェスティバルにも、ボランティアの清掃活動にも積極的に参加している。

去年まで、国際交流センターでは留学生にアルバイトの紹介をし、面倒を見てきたが、今年入学した学部生の一年留学生たちには、自立をさせ、責任感を持たせるために、アルバイトの世話をしないことにした。それにもかかわらず、この経済不況の状況下でアルバイトを希望するゼミ生の留学生全員が自力で無事にアルバイトに就いた。これは容易なことではなかった。最初は、なかなか見つからなくて、イライラする人も現れたが、ゼミの時間に面接についての注意事項、知っておくべき礼儀作法などの勉強と指導を即取り入れられたことによって、皆が次から次へとアルバイト先を見つけた。教養教育のおかげで彼らは日本社会へ小さな一歩を踏み出すことができたのである。アルバイトの問題が解決すれば、留学生にとっては、金銭面で安心することができ、安定な生活が送れる見込みができるのである。

また今まで、自転車やバイクによる交通事故が頻繁に起こっていたが、教養演習の時間を利用した交通安全教育を継続したことで、一年生は、来日して約十カ月、今のところでは全員無事故無違反となっている。

とはいうものの、これからの課題は、依然として数多く残っている。たとえば、如何に留学生全員の勉学意欲をしっかりと持たせ、積極的に学問に取り組むことができるように導くか。大抵一年目は、なんとなく真面目に取り組んでいて、二年次になると、だんだんやる気が減っていく傾向が出てくる。特に学習奨励金を貰えなかった人にはそういう現象が強く現れるのである。不平不満、無気力、自分自身に対して自信を失い、他人に対しては不信感が募り、ひどいときには、自閉症になることもある。このような学生に対しては、もつときめ細かな指導と温かい加護が我々教育側に求められるだろう。

また、留学生が抱える生活上、勉学上のさまざまな悩みや問題に対して、如何に適時に適切な指導と相談を行うか、対応するか、如何に異文化の中で円滑な留学生活を送れるよう支援するか、日本の大学での勉強生活になかなか慣れない、ついていけない留学生を助けて、困難を乗り越えられるように我々教員は常に考え続けなければならない。個々人の力は小さくても、数多くの方々、全学の教職員の力によって、初めて立派な学生、国際社会に有用な人材の育成が可能となる。

## 六、おわりに

本学では、今までなかった留学生に対する教養演習のゼミができてから、今年で二年目になった。結論からいうと、日本人学生と違った生活習慣、文化背景を持つ留学生たち、そして日本に来たばかり日本語の能力がまだ不十分な留学生たちを対象に一年間の特色ある、彼らが一番必要としている、求めていることに合わせた教養教育をしっかりと取り組むことができ、たいへんよかったと思う。

いろいろ工夫したものの、まだ経験が浅いので、満足できないところもたくさん残っている。これからもっと効果がある教育と指導方法を研究し模索しながら、留学生向けの教養教育を改善することを心がけて精進する。

## 謝辞

本研究に関わっている留学生の異文化体験、見学にあたり、平成21年度富山第一銀行奨学財団の助成を受けたもので、深く感謝を申し上げます。

留学生に教養教育を実施することに当たっては、数多くの方々のご協力と支援を頂いていることにも感謝の意を表します。

## 参考資料及び参考ホームページ

- (1) 新華網 [www.nows.cn](http://www.nows.cn)
- (2) 日本新しい時代教養教育発展の報告解説 <http://xbyx.cersp.com>
- (3) 留学生について <http://www.epochtimes.co>
- (4) 中国留学網 <http://www.liuxue.net>
- (5) 「現代中国人の日本留学」 段躍中 明石書店
- (6) 「大学生の品格教養は入学当初から着眼開始」国立台湾師範大学 彭森明
- (7) 「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」 川那部和恵  
奈良教育大学教育実践開発講座

